

## 結びにかえて

御坊祭民俗文化財調査委員会委員長 吉川 壽洋

御坊祭にあつてはきわめてダイナミックで華やいだ出し物として知られ、見物の人々をして引き付けてやまない存在である四つ太鼓は、一般に太鼓台と呼ばれ、瀬戸内海沿岸部や島嶼に色濃く分布する神賑行事の具である。和歌山県内では旧日高郡のみに集中して分布していて、屋台の中央にある枠組みにロープで結びつけられた大太鼓を打つ四人の乗り子は陣羽織を着て、顔に歌舞伎風の隈取りを施す。乗り子は足を地面につけることがなく、その意味では神聖さを感じさせるが、四つ太鼓そのものは、あくまでも余興の具として取り扱われている。

この神賑用具は、大阪府堺市界隈では、蒲団太鼓・チョーサ・屋台・サシマシヨ・千歳楽・ヨイヤセ・コッコデシヨ・太鼓山・蒲団段尻などと呼称されており、また四国の香川県では、太鼓・チョーサ・サシマシヨ・千歳楽・蒲団太鼓・ダンジリなど何種類もの名前で呼ばれている。このように、その形態や芸態がいろいろに変化しながら広範囲に伝播して行っていることが知られる。

御坊祭の四つ太鼓は、現在九組から出されていて、残りの一組からも以前は出されていた。いずれも四本柱の上に正方形の格天井を載せたものに黒色のビロードで縁取りをした赤い布の天幕をおおったいわゆる「屋根型太鼓」に分類されているものである。愛媛県新居浜の太鼓台のように豪華絢爛を極め、きわめて大型化したものとは違って、どちらかというところから中期の太鼓台の様式を伝えたものと考えられる。

四つ太鼓を押す時の掛け声は、御坊祭においても以前は近隣の土生祭などに残る「サツサ ハリシヨ ヨイシヨ サーヨーイヤ」といったものであったと言われているが、後に伊勢音頭が入って来て、それが一般的となった。しかし、四つ太鼓が芝入りする時や四つ太鼓を高く支えて競い合う時など押し手の気分

が大きく高まった場面で発せられるのは「ホーエンヤイ ホーランエー ヨイヤサノサ」の掛け声である。この掛け声は日高浜での新造船の進水式の折にも、新造の網船を少しばかり沖合に漕いでいった後、艫櫓だけを残して、他の櫓は流し、漕ぎ手が左右の舷に分かれて力一杯網船を上下させて潮を船内に入れ清める儀式を行う場合にも聞かれるが、山陰沿岸や瀬戸内沿岸、瀬戸内海を出た外海の熊野灘においてもこの掛け声が行われている。例えば、「ホーランエンヤ祭」の名を持つ島根県松江の城山稲荷神社の祭礼でこれまで十二年に一度卯の歳に行われていたが、最近は十年に一度の割で行われている海上渡御神事においても「ホーオオエンヤ ホーランエ エヤサーノサ」の掛け声に合わせて、色とりどりの衣装を着けた踊り子たちが、權伝馬上で剣權踊りと采振り踊りを披露する。この踊りの起こりは文化五年（一八〇八）のことと言う。同じ島根県の八束郡美保閼町にある美保神社の蒼柴垣神事において、神社前に向かう船は「ホーライエツチャ」の掛け声とともに漕がれる。山口県徳山市にある裕島の貴船神社の夏祭りは、海上渡御で有名であるが、神輿は御旅所までの海上を「ホーランエンヤ」の掛け声で押し渡る。また、愛媛県の松山市に近い興居島の權伝馬は小さきまで、大きな船には十人以上、普通の船でも八人の漕ぎ手が乗り込んで「ホーランヤ サエー ホーライエ」の掛け声をあげながら漕ぐという。

瀬戸内海を通過して熊野灘に出ると、權伝馬競漕が多く見られ、和歌山県東牟婁郡串本町大島の水門神社の祭礼では、隼・鳳の二艘の權伝馬が串本まで漕ぎくらべをする。その時も掛け声は「ホーエンヤ ホーランエー」である。主眼が漕ぐ技術を観衆にアピールすることにある同郡那智勝浦町の勝浦八幡神社の權伝馬競漕でもホーエンヤの掛け声をあげながら力一杯漕がれる。同じ那智勝浦町宇久井神社の船渡御でも同じく漕ぐ船一艘が付き添う。串本町古座の「河内祭の御船行事」において清暑島（コオツタマとも呼ばれる島）を巡る中学生

による戦合と称される競漕でもホーエンヤの掛け声が聞かれる。熊野速玉大社の速玉祭では、九艘の権伝馬が熊野川中の御船島を回り競漕して乙基河原に到着するのだが、この折にも白い腹巻の漕ぎ手達はホーエンヤの掛け声で腕も折れよとばかりに競漕する。

四つ太鼓における最高の見せ場は神前で若衆が四つ太鼓を力を合わせて差し上げて静止させる所作であるが、この時の掛け声が「サイテクリヨ サイテクリヨ」の繰り返りで、その後いったん四つ太鼓を地面におろして、ぐるぐる回転させながら「キリキリマイコ キリマイコ」と叫ぶ。これを御坊祭では「うずやまいこ」といい、この後再び差し上げる動作に入る。「キリキリマイコ」の後、濱之瀬組だけは、四つ太鼓を投げ上げるようにして、「ホッテヤレ」を行う。吉原祭でもそれが見られる。「キリキリマイコ」は瀬戸内海の渦潮を連想させるところがあり、「サイテクリヨ」の時に四人の乗り子が身を反り返らせる所作をして、大きく伸ばした手先に握ったバチでチヨウサイ棒に渡された棹の部分を軽く叩く所作をする。この所作は瀬戸内海沿岸で見られる二艘とか四艘とかの舫船もやいを舞台に剣権踊りをしていた若者がいつせいに身を海中に投じてみせる「そりがい」の動作の勇ましさを髣髴させるものがある。もともとこの方は漕ぎ手が全員背中を合わせるようにして立ち上がり、次に権を握って海へ倒れこむのであるが。

このようにみると、四つ太鼓の形態や「ホーエンヤイ ホーランエ、ヨイヤサノサ」という掛け声、さらには四つ太鼓の乗り子の姿態等が瀬戸内海を伝播の道筋として、権ねり踊りなどの風流の文化となりどんどん広まって行き、そこに瀬戸内海文化圏ともいべきものを形成して行っていると思える。見ることが出来る。海に生きる人々が伝えた特色ある文化を継承発展させて行った地点として御坊は重要な位置を占めている地であると言える。

